

産学官連携によるアントレプレナーシップ 醸成教育プログラム

2021年12月6日(月)

鍛島 宗範

Kashima Munenori

関西大学梅田キャンパス
スタートアップ支援コーディネーター



事前課題動画 事例紹介

関西大学梅田キャンパス HACK-Academy

2016年に開設された関西大学梅田キャンパス。キャリア支援を行う鍛島宗範(かしま むねのり)氏は「単に就職や起業ができればいいのではない。大切なのは、学生が自ら学び続けていくこと」と考え、「HACK-Academy」を立ち上げました。そこには、「プロティアンキャリア(個人)」と「アントレプレナーシップ(社会)」の融合により、自分の人生を主体的に生きる力を身につけてほしいという思いがあります。

HACK-Academyの目的は「ビジネスに触れながら実現したい夢や志を育むこと」。思考力、実践力、知識の融合を大切に、「Will(新たな価値創造)」「Can(社会の変化を知り、できることを増やす)」「Challenge(果敢に挑戦する)」といった内容の講座を展開しています。

現在のパートナー企業は21社。大阪府や近畿経済産業局ほか、自治体も含まれます。すべて体験型プログラムであるのが特長で、他大学の学生も参加可能。オンラインの普及もあってか、東京や東北から多くの参加がありました。「将来について話せる仲間がいない」そんな学生たちも参加しています。

学生たちはまず、興味のあることを書き出すなど、自分と向き合うことから始めます。プログラムを受講することでしっかりとした省察を行い、次のアクション、起業のプログラムに参加するなどを自分で決めていくのです。「学生生活の4年間を社会人への猶予期間と捉えるのではなく、自分の人生にオーナーシップを持っていける、そんな人材を育成したいと考えています」(鍛島氏)

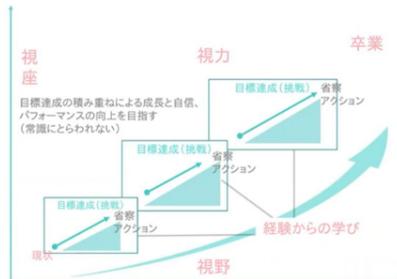
企業セミナーの一例として「関西から始まるイノベーション～関西でDXを推進するためには～」というテーマで行われた約2ヶ月半のPBL型プログラムがありました。2回目以降はオンライン開催となり、6チーム24名の学生に対し、企業から9名がメンターとして参加。答えではなく質問を投げかける形をとり、学生たちはキャンパス内でディスカッションしたり、メンターと Slack などを通じて熱のこもったやり取りをしていました。

夏休みには起業プログラムが実施されました。サービスを創っていく楽しさに加え、時給ではなくお金を稼ぐことの難しさを体感できるプログラム構成です。同じ志を持つ仲間を集めたり、学生の方からメンターにアポイントを取るような意識づけもされました。

3日間のイノベーションキャンプでは、事業のアイデアを出し、それを通じて自分が何を実現したいのか、壁打ちをしながらどんどん事業をブラッシュアップしていくよい機会となったようです。

まだまだプログラムを作り出して2年。HACK-Academyはこれからどんどん発展していきます。体験により視野が広がり、視座も上がっていき、将来も自ずと見えてくるでしょう。学生が夢や志を抱き小さな一歩を踏み出す、そこをサポートできたらと、鍛島氏は語ります。

開催日	内容	講師
12月4日(土)	起業設定ワークショップ	岡田 浩一
12月5日(日)	イノベーションワークショップ	HACK-Academy / イノベーションワークショップ
12月6日(月)	第1回例会	このからの起業 穂村 友希
12月7日(火)	第2回例会	ノーコード作成 川口 大輔
12月8日(水)	第3回例会	中間報告会
12月9日(木)	一歩学生発表会	ML Field / イノベーションワークショップ
12月10日(金)	STARTUP DAY	本学運営 西村 大輔



OPENING

井上 示恩 Inoue Shimeon 日本学生支援機構 学生生活部長

ワークショップのはじめに、日本学生支援機構の井上学生生活部長より開会の挨拶がありました。登壇者のトークやグループワークでの意見交換を通じて、人材育成における産学官連携や、学生の成長に必要なマインドを共有し、活かしていただきたいと述べました。

登壇者による質疑応答

大津 晶

Ohtsu Sho

小樽商科大学
商学部社会情報学科
教授/学長特別補佐



及部 一堯

Oyobe Kazutaka

NTT西日本
イノベーション戦略室 シニアマネージャー
株式会社パラレルパートナーズ 代表取締役



オープニングトークの後、関西大学HACK-Academyについての動画と参加者から事前に集めたコメントをもとに、登壇者3名によるトークが行われました。ファシリテーターは小樽商科大学商学部教授の大津晶(おつしよ)氏。講師は、関西大学梅田キャンパス スタートアップ支援コーディネーターの鍛島宗範氏。そしてNTT西日本 イノベーション戦略室 及部一堯(およべ かずたか)氏がゲストコメンテーターとして参加。起業家でもある同氏は、HACK-Academyのメンターも務めています。

鍛島 HACK-Academyのプログラムの担当は基本的に私一人。他の職員の協力を得ながら、周知から運営、企画まで行っています。キャリアセンターとの整合性がとれるよう、最初にきちんと切り分けておく配慮をしました。

大津 学生への情報発信はどうされていますか？

鍛島 学内インフォメーションシステムに加え、SNS広告も少し行いました。そのことで、他大学の学生にも知ってもらえたのかと思います。参加者は1年生が中心で、学部は本当にさまざま。「何かにチャレンジしたい。何かやっておかないと不安だ」と焦っている学生が多かったです。

及部 最初はやはり学生レベルだなという印象でしたが、毎週毎週考え方が深化しているのがわかるんです。1カ月で格段にスキルが上がったと感じました。

大津 企業にはどんなアプローチをされたのですか？

鍛島 一つは、起業家へ向けて「一緒に大阪を盛り上げよう」と呼びかけました。そして大企業へアプローチする際には、人事ではなく、新規事業担当部署に行きました。会社側のメリットや、その後一緒にできることをお話していった形です。

及部 企業側のメリットも大きいですね。ブランディングにもなりますし、新規事業創出に強い人材の採用が期待できます。企業が求めているのは、今あるスキルではなく、スキルをこれから身につけるモチベーションがある人。参加した社員も「俺もやらなきゃ」という気になる雰囲気を感じていました。

大津 学生にとっては、キャンパスとは違うコミュニティを持ち、そこでは勇気を出していろいろなことにチャレンジできる。質的な意味ではすごく大事なポイントだと思います。企業にとっては、採用のみならず、ここから異業種企業間のつながりができるといった展開もあるかもしれませんね。

グループワーク -Part1-

質疑応答の後、10グループ(1グループ4人~5人)に分かれ、グループワークが持たれました。テーマは「各大学の起業家育成の取組」「自社の社内人材育成」についてです。大学教育において、大学3年次に就職活動が始まるのが未だ主流の現代。終身雇用という安定的な雇用形態へも変化の兆しが見える中、その変化に対する「問題意識」や「取組」を、企業そして大学関係者からの視点で、どう考えるのか。ブレイクアウトルームでの20分間の意見交換の後、メインルームにて全体共有での発表がなされました。

Topic

留学生の起業

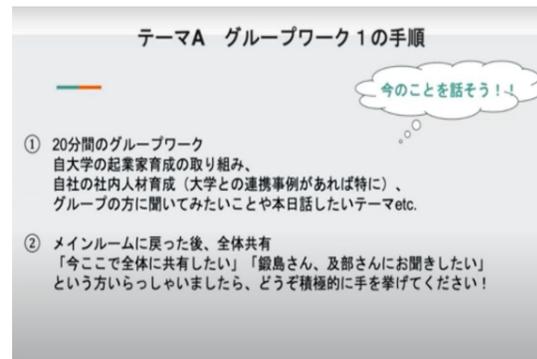
あるグループでは、「留学生の起業」を中心的に、多くの意見が出されました。ビザの都合上、日本に滞在する期間を延長することが難しい留学生にとって、日本で起業する際に相談先がないことやビザの起業家基準が厳しいことなど、留学生の起業に問題意識を感じている参加者からの課題の共有が多くありました。

同時に、起業を留学生に勧めることによるジレンマもあるようです。グループでの意見交換の中で、「省庁で留学生に対する新たな措置を追加する案」や「起業した後、失敗した際の救済策を用意する案」なども飛び交い、留学生に起業を勧める前に、まずは制度の変革を実施する必要があると、起業を留学生に安易に勧めることへの懸念の声も出ました。

「起業のケア」の部分に関しては、在学中に起業したケースを例に、卒業時に事業が軌道に乗らない場合、就職を促すなどの取組を実施しているという大学の事例も紹介されました。

中国人留学生へのサポートについては、「いかに日本で留学生に対する雇用をつくるか」について議論が持たれ、「留学生が日本から出ていってしまう課題」や「実際に留学生が起業する際の行政手続で問題が出てしまうなどの課題」についても話が及びました。

まだ大学側が起業プログラムを学生に提供できていない点、大学としても支援の体制が整えられていない点も論点に上がり、留学生が大学在学中に起業することに対する課題意識を持つ参加者が多くありました。



全体共有 -Part1-

全体共有では、「各大学の起業家育成の取組」の現状と課題について、グループワークで出た意見が発表されました。

学生の「起業スイッチ」

学生自身がセーフティゾーンから一歩出て「起業のスイッチ」をいかに入れていくかということ。加えて、どのようにイノベーションを起こせるようなアイデアが学生のうちから生み出されるのかという話が出ました。さらにそこから企業や地域とのかかわり合いの中で、新たな価値が生み出されるのではといった提言が登壇者からもありました。

アントレプレナー教育の課題

「アントレプレナー教育の課題」についても意見があがりました。大学の授業にアントレプレナー教育を組み込んだ場合、学生側は1回の受講、教員側は毎年異なる学生に教えることになった結果、教育への深化がないことが一番の懸念だと。それに対して、前年の振り返りを行うことで翌年のプログラムを毎年改定しているという事例の紹介もなされました。ある大学では、10年前より取組を始め、その過程でビデオ教材を準備してきたという話があり、前年の受講生の中から教育助手を確保し、全体の負担を軽くしながらアントレプレナープログラムのレベルアップを図っているとのことでした。

学生と大学、双方にとってプラスとなるには

大学内で起業ビジネスを行う際に、結果として学生と大学側の双方にとってプラスになる必要があり、両者どちらかの持ち出しが大きくなりすぎるケースは避けたいといった意見もありました。またその意見に対し、学生を起業家として支援していくスタンスがある企業と大学側が協働し、アントレプレナープログラムに取り組むことが望ましいといった案が登壇者より出ました。

グループワーク -Part2-

2回目のグループワークは、「これから各参加者が職場に持ち帰って、どんな取組をしたいのか」という視点で、30分間の意見交換を行いました。

各グループにて「①アントレプレナー育成と教育目標／育成する人材像」「②起業を選択肢に入れたキャリア支援について」「③産学連携によるリカレント教育／学び直し／リスクリング」「④その他」の中からお題を選び、話し合いで出た「今後自分事としてできそうなこと」をグループごとにスライドへ書き込み、全員で共有していきます。

Topic

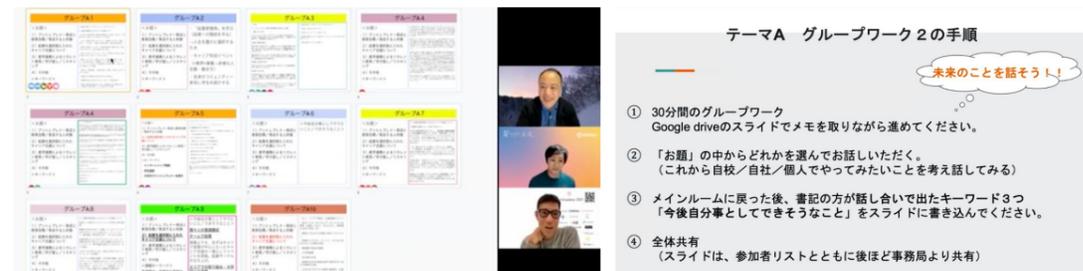
起業を選択肢に入れたキャリア支援

インターンシップを受け入れている企業からは、グローバル企業での働き方に興味を持っていることに加えて起業したいと考え、インターンシップへ参加する学生中にもいるといった話が出ました。また自社に就職しないからといって学生を無下にすることはなく、その繋がりを企業としても尊重し、提供できる情報を学生に提供する体制をとっているとのこと。選考の際にも「将来的に起業をしたい」という志があれば、その想いを応援したいといった声も企業担当者から出ていました。また、サマーインターンシップに参加する学生は意識が高く魅力的な学生が多いため、多くの企業での就職活動の実情はインターンシッププログラムを通して採用したい学生を探し、早い段階で内定出しを行うことが通例になっており、内定出しをする割合も年々早く、そして増加傾向にあるとの話が出ました。

企業でのインターンシップにより単位取得が可能な大学では、学生が起業を視野に入れている場合は本人の意志を尊重し、学生のキャリア形成における選択肢をヒアリングし、大学で提供できる資源を活用できるようなサポート体制をとっているとのこと。学生の企業でのインターンシップの際にも、大学と企業での事前すり合わせの目線が大切だとの意見がありました。

キャリア教育の観点からも、起業に対する明確なビジョンがある学生であれば、インターンシップでの配属部署も考慮されるとの話が企業担当者からありました。その場合、会社立ち上げ時に重要になる人事機能や経理、法務などのバックオフィス系の部署、新規事業立ち上げの機会に恵まれている部署への所属など、学生へ事前ヒアリングをした上で企業側で受け入れ先を決定しているとのことでした。

起業家育成を主な目的としている大学と企業が協賛するビジネスコンテストについても、事例が紹介されました。ある大学のキャリアセンターが主催をしているビジネスコンテストでは、いくつかの民間企業が協賛し、会社の立ち上げを支援しているそうです。



全体共有 -Part2-

2回目の全体共有では、企業と大学等、双方の参加者から、ネクストアクションとして、次のような内容の発表がありました。

学生が起業後も在学するには

学生が起業した後も大学へ在籍できるかどうかという課題があるという認識が示されました。起業を志す学生に対しても、大学の価値を上げる必要があるのではないかといった声に対し、起業している大学生を休学にしても退学にはしないといった方針を取り入れているといった事例の紹介がありました。他にも、大学でアントレプレナー教育をすることによって、学生がメンターと会話をし、その中で前向きにやりたいことや学びたいことが明確となり、履修変更の頻度が夏を経て秋に増加したという声もありました。

副業やダブルワークという価値観

「就職か起業か」といった2つの選択肢ではなく、「複業やパラレルワーク」そして「ダブルメジャー」といった選択肢こそ、従来のメンバーシップ型の新卒一括採用ではなく、働き方改革におけるジョブ型雇用の普及といった過渡期において、注目される価値観なのではないかとの提言がありました。

「産学官連携によるアントレプレナーシップ醸成教育プログラム」ワークショップの終りに

「就職や起業」も自分自身が活動するための一つの手段でしかない、学生が選択可能な選択肢をより多く提供することが大切なのは、と及部氏はいいます。

「起業家精神」や「アントレプレナー」といった言葉も、「自分が何かしようと考えたときに自由に選択することができる人材になること」。そして、それは会社を起業することでもあるし、企業でイノベーションを起こす活動にも当てはまると思います。そうすることによって、仕事でもプライベートでも自分がどちらも選択できるようになり、結果として自身の生活が豊かなものへと変化していくと。「アントレプレナーシップとは本来マインドを指すもので、様々な大学の中で様々な生き方があることを学生に伝えてあげることがとても大切」と及部氏は語りました。

鍛島氏も、及部氏と同様に、「就職や起業」は手段でしかないと考えているとのこと。大学在学の4年間を使って「自分がどう生きていきたいのか」を探していく。その中には自分で旗を立てて起業する人もいれば、その旗に寄り添ってサポートをするのが得意だと思える学生もいる。その前提に立った上で、アントレプレナー教育のプログラムを経験した結果、自分にどんな適正があり、どういった人生を選ぶと楽しいのか、自分の得意なこと、活かせる場所はどこかを自身に問う。アントレプレナー教育は、そういった要素を学生に知ってもらえる絶好の機会だといえます。そして最後に「そういった機会を学生にたくさん提供してあげたい」と述べました。